

現代語訳 浄土三部経 目次

刊行の辞 3

監修のことば 5

序にかえて——浄土宗の教えと「浄土三部経」 10

凡例 23

康僧鎧訳 仏説無量寿経

卷上 25

卷下 99

量良耶舎訳 仏説観無量寿経 181

鳩摩羅什訳 仏説阿弥陀経 246

あとがき——現代語化をふり返って 262

仏説無量寿経 卷上

曹魏¹において、インドから来た三藏法師²・康の国の僧鑑³が訳す⁴

○第一⁵

序分

私、「阿難は釈尊から」次のように聞いている。ある時、釈尊が王舎城の〔東北に聳える〕耆闍崛山（靈鷲山）⁸におられて、「釈尊のもとには総勢）一万二千人にも及ぶ、きわめてすぐれた出家修行者（比丘）⁶たちが会していた。「彼らは」みな偉大な聖者であつて、すでに様々な神通力を具えた者たちばかりだつた。

その名前を〔紹介すると、〕了本際尊者・正願尊者・正語尊者・大号尊者・仁賢尊者・離垢尊者・名聞尊者・善実尊者・具足尊者・牛王尊者・優樓頻伽葉尊者・伽耶迦葉尊者・那提迦葉尊者・摩訶迦葉尊者・舍利弗尊者・大目犍連尊者・劫賓那尊者・大住尊者・大淨志尊者・摩訶周那尊者・満願子尊者・離障尊者・流灌尊者・堅伏尊者・面王尊者・異乗尊者・仁性尊者・嘉樂尊者・善來尊者・羅云尊者、「そして私」尊者阿難などであり、今、名を挙げた方はみな〔偉大な聖者たちの中においても、なおかつ〕指導者のな立場にあつた。

また〔その時、そこには〕多数の大乗の菩薩方も顔をそろえていた。〔すなわち〕普賢菩薩・妙徳菩薩⁹・慈氏菩薩¹⁰をはじめとする今のこの賢劫¹¹の時代におられるすべての菩薩方、加えて賢護^{げんご}など十六名の菩薩方、〔さらには〕善思議菩薩^{ぜんしぎ}・信慧菩薩^{しんね}・空無菩薩^{くうむ}・神通華菩薩^{じんずうけ}・光英菩薩^{こうよう}・慧上菩薩^{えじやう}・智幢菩薩^{ちどう}・寂根菩薩^{じやくこん}・願慧菩薩^{がんね}・香象菩薩^{かうぞう}・宝英菩薩^{ほうよう}・中住菩薩^{ちゆうじゆう}・制行菩薩^{せいぎやう}・解脱菩薩^{げだつ}といった方々であった。

〔これらの菩薩方は〕みな普賢菩薩の高徳な修行を手本としている。〔普賢菩薩と同じように修行する者たちは〕様々な菩薩方の〔発す^わであろう〕計り知れない誓願^{せいがん}とそのため^{ため}の修行をすべて体得し、あらゆる功徳^{くどく}がその身に具わるのである。どこへでもあらゆる世界に赴いて、巧みな手立てで人々を仏の教えへと導きつつ、自らは仏の境界に入つて、覚りの境地を究め、あらゆる世界において自らが仏として覚りを開いている姿を示すのである。¹²

〔すなわち、まず第一にこれらの菩薩はみな〕兜率天^{とそつてん}¹³に身を置いて仏の正しい教えを弘め、〔第二に人間界で教えを弘めるために、あえて〕その宮殿から舞い降り、母となるべき婦人の胎内^{たまい}に神を宿す。〔第三にそうした菩薩は王子となるべく、王妃である母の〕右の脇から生まれ出ずる。〔そして〕実際に七歩あゆむと、〔その身から〕眩いばかりの光明が放たれ、あらゆる世界は隈なく照らされる。〔さらに〕数限りない仏国土^{ぶつこくど}は大いに揺れ動く。〔そこで、菩薩は〕自ら声高らかに「我〔こそ〕はこの世において、この上なく尊い者となるであろう」と宣言する。帝釈天^{たいしやくてん}¹⁵と梵天^{ぼんてん}¹⁶は〔菩薩に〕

恭しく仕え、天人や人々¹⁷も仰ぎ敬うのである。

〔第四に菩薩は〕数学・文芸・弓矢・乗馬〔など文武全般にすぐれた能力を発揮する姿を〕示し、〔そればかりか〕仙人の秘術までも究め、〔加えて〕あまたの書籍に精通する。〔第五に〕外にあっては武芸の腕を磨き、宮中にあつては愛欲の中に身を置く姿を示す。

〔第六にやがて、〕老・病・死〔のありさま〕を見て世の無常に気付き、国も財産も王位も棄てて、山に分け入つて覺りを得ようと〔志〕す。〔そこで、〕乗ってきた白馬と身に付けていた宝冠や装身具を〔御者に託し王宮に〕¹⁸帰らせ、美しい服を脱ぎ捨てて修行者のまとう粗末な衣〔法服〕を身に付け、髪も髭も剃り落とすのである。〔そして〕樹の根元に威儀を正して〔静かに〕坐り、苦行を重ねること六年に及ぶ。〔その〕修行は出家者としての振る舞いに適うのである。

〔第七に菩薩たる者は、あえて〕五濁¹⁹の世に生まれて、他の多くの人々〔の姿〕に合わせて、塵や垢にまみれた〔仮の姿を〕現す。〔苦行を捨てて、身を清めようと〕川²⁰で沐浴したが〔岸に上がれないほど衰弱していたので、〕天人が〔現れ、水辺の〕樹の枝を押し下げ〔差し伸べて、菩薩が〕水からよじ上ることができるようにする。

〔覺りの時が近づくと、珍しい〕靈鳥たちは〔菩薩に恭しく〕付き従い、〔菩薩は〕覺りの座に辿り着く。〔すると、覺りを開くめでたい〕前兆として、〔帝釈天の変じた〕吉祥〔という名の人〕が現れる。〔吉祥は菩薩が積んできた〕福徳を讃え、〔菩薩は吉祥が〕施した〔覺りの座の下に敷く〕草を

慈悲深くも受け取り、菩提樹の下に敷き〔詰め、その上に〕足を組んで坐る。

〔菩薩は眩いばかりの〕大いなる光を放ち、悪魔に〔自身が今まさに覺りを開こうとしている〕このことを気付かせる。〔すると〕悪魔は全軍を率いてやって来て、〔手を替え品を替え菩薩を惑わせようと〕肉迫してみる。〔しかし、菩薩は〕智慧ちえの力で彼らをみな打ち負かす。

〔そして、ついに菩薩は〕えも言われぬほど奥深い真理を得て、この上ない覺りを体得するのである。

〔第八にその時、〕帝釈天や梵天が〔姿を現し、菩薩がすべての人々のために〕その真理を説き弘めるよう心から請い願う。〔そして菩薩は思いのままにあらゆる世界へと足を延ばす〕仏の歩みを用い、〔獅子が〕吼ほえるような仏の〔雄々おおしい〕声で〔教えを〕説く。〔その様子はあたかも〕太鼓をたたき、法螺貝ほらがいを吹き、剣を取り、旗をたてて〔進むようであり、また〕雷鳴を轟かせ、稲妻を走らせ、雨を降り注いで〔万物を潤し〕、施しを行き届かせる〔ようである。そのようにして、〕常に教えを示す声で世の人々を〔迷いから〕目覚めさせる。

〔またその〕光明は、数限りない仏の国々を隈なく照らし、〔それによって〕すべての世界は様々な震動するのである。〔この光明は〕魔界の隅々にまで及び、魔王の宮殿をも揺り動かす。〔そのため〕悪魔たちはみな恐れをなしてひれ伏し、帰依きえしない者はいなくなる。〔このようにして〕邪よしまな教え〔という〕網を引き裂き、世間の誤った考えを消し去り、様々な煩惱ぼんのうを打ち払い、欲望という深い堀